

琉球大学学術リポジトリ

農家簿記の奨め

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-06-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福仲, 憲, Fukunaka, Ken メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/20561

一 農家簿記の奨め 一

紙の消費量はあるいみでその社会の文化のバロメーターだといわれます。インドや中共の如き戦前は国民の大半が文盲であった国での、今日もっとも大きな変り映えは紙の消費量だそうであります。これを歴史の流れとして見るならば、人間がただ生きて(食いつないで)いる段階から生活をク考えるクという段階への歩みだともいえるのであります。

われわれの周りでも、やれ農業の危機、曲り角、あるいは構造改善だのという和直ぐ指導者の間ではク考える農民クカ叫ばれてきたのも久しい話であります。にも拘らず農家の一人一人にとっては、なるほどどうなづいてはいても実際にはなかなか実感をとまわらないものであります。つまり農家にとっては何をどう考えていくのか、具体的に考えて実行するための資料や指導助言が甚だ足りないためにク考える農民クたるには相当のへたたりを農家自身が感じているのではないのでしょうか。これが今日なおク勤による農業クからぬけきれない農民の姿ではないかと思ひます。

こういう状態を突破するためには政府等による調査研究や資料の提供も重要ですが、何よりもまず農家自身が何かをなすことが一層大切のようです。そのためにはまず、考えること、や、記録すること、から始められるのであります。そこで今後の新しい経営改善への第一歩として農家簿記について考え、それをお奨めしたいと思います。

次の表のとおり本土における簿記の普及は順調に伸びており、その役割も最近の農業近代化の勢にのってますます理解されるようになりました。けれども沖縄の場合はその目的が果していかほどに役立てられているのでしょうか。因みに沖縄の凡そ3%の普及率に比べて本土では

既に昭和10年には10%に達しており、現在では2割の農家が自分の手でわが家の経営をつぶさに診断し設計していることとなります。この30年に近い年月の遅れをどんなに理解したらよいものでしょうか。そこには実に多くの問題が横たわっているように思われます。しかし簿記普及のむつかしさは農業生産や農村生活が複雑であるばかりでなく、農家の欲している実用性と手もとに与えられた簿記様式とのチグハグなことから生じていることは特に反省されねばならないでしょう。「もちろん百姓は商人とは違うのだ、お金の勘定よりもまず農作物を上手に作ることだ」とか、「簿記を付けても収入が増えるわけではないし、赤字がハッキリしたり、時々へのソクリができなくなったり……………」というような経済を無視した単なる技術屋一点ばりの観念では、農家簿記の複雑さ、わずらわしさはたしかに農家にとっては面倒なことですらあるかも知れない。だが最近の農業をとりまく経済情勢はそれをもこえて簿記の必要さを痛感させるところまで迫っているように思われます。たとえば農産物価格制度における農業所得及び生産費補償の問題、適正な

本土における農家簿記の普及状況

年次	普及部数	農家戸数	普及率
昭和	冊	戸	%
2	14,918	5,614,608	0.3
7	84,924	5,642,509	1.5
12	823,993	5,574,879	14.7
25	866,528	6,176,419	14.0
31	761,507	6,105,049	12.5
32	920,515	6,042,915	15.2
33	1,073,336	6,042,915	17.8

沖縄における簿記普及状況(1962年推計)

簿記の種類	生産費簿記				経済簿	家計簿		
	水稲	パイン	甘蔗	肥育豚	自計式	自計式	残高式	多桁式
記帳戸数	70	42	40	48	55	35	1.100	1.400
指導機関	統計庁		特産課	畜産課	農業改良課		農連	

※ 農業改良課の数字は1960年、それ以降は中止している。

課税基準のための農家の青色申告制度の問題、あるいは農業共同化における出資、労働、利用をはじめ所得分配などに当っては欠くことのできないものになっており、これらの施策はいずれは沖縄においても重大な課題ではないでしょうか。

普通の農家簿記の主な目的は、

- 1) 年間の経営の活動の結果について損益計算して赤字か黒字かその大きさを知る。
- 2) 経営の診断と設計によつて計画的な経営をする。
- 3) 本土の場合は昭和25年来、青色申告制度の立法により不公正な課税を防止する。

などにそなえるものと考えられる。このように一家の働いた結果がいかほどの利益を生んだのか、作物や養畜のどの部門で一層多くの利益をえたのか、についても農家は案外に知らない場合が多いではないでしょうか。

あるいは何か原因で赤字を生じたのか、どの部門に経営の改善のメスを入れるべきかを診断したり、また青色申告制度によって自己の正当な利益を法的にも守ることができるならば、これこそ、考える農民々ではないでしょうか。

更に、簿記の種類や分析いかんによっては単に損得を見るばかりでなく、農業と兼業、所得と家計費などの経営と生活を合理的に計画したり、また年次別、部門別の労働配分、施肥や管理作業の適正化などによる取量や費用の相異を明らかにしたり、あるいは新しい技術や農機具の経済効果を測定したり、市場価格の変動に見合った生産計画、販売計画のためにも役立つものでありましよう

このように農家簿記の利用は単に金銭や財産の変動を見るばかりでなく、それを毎日の具体的な技術の面にまで反映させて見るのが大切であります。

とかく昨今のように沖縄の農業も実に目まぐるしい環境の変動に直面しながら、それに対処するための農業センサスをはじめとする経営経済に関する官庁統計すらまだ整備されてない、いわゆる暗中模索の中に置かれた沖縄の農業だといっても過言ではないように思います。そもそもっと大事なことはそれに対する農家や指導者の関心もまだまだそれだけ低いのではないかとと思われることです。

かつて大学での同僚が親父の残した大正以来30年間もの煤だらけの記録をもとに実に貴重な論文を仕上げたことを思い出すと、それが日本農業の最先端をいく、佐賀段階々の農家とはいえ30年間の農家の歩んできた足跡を比べてみて、記録すること、紙を使うこと、の進歩と遅れをつくづく感じさせられます。(福 仲 憲)